

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			観光学 研究科	観光学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	観光学研究科観光学専攻 博士後期課程4年次		権 赫麟 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	立教大学教授		豊田由貴夫 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ ○人文 ・ 社会	個人・共同の別	○個人 ・ 共同 名		
研究課題名	文化の真正性めぐる観光とポピュラーカルチャー相互作用に関する研究 —日本のポピュラーカルチャー観光を事例として—				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	観光学研究科観光学専攻 博士後期課程4年次		権 赫麟		
研究期間	2011 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はポピュラーカルチャー観光を対象として、現代社会の脱近代的な文化状況における「観光」と「真正性」の新たな関係性を検討し、今日の文化環境で観光が果たす役割及び機能を明らかにすることを試みた。国内外の観光地を対象に調査を行った結果、文化構築におけるポピュラーカルチャーと伝統、両者の相互依存的な関係性及び、伝統とポピュラーカルチャーの文化的接合を通して新たな「真正性」を構築する観光の機能が明らかになった。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[真正性] [ポピュラーカルチャー] [文化構築]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、文化の真正性をめぐる観光とポピュラーカルチャーの相互作用を考察し、ポピュラーカルチャー観光地において真正性が構築されるプロセスで伝統とポピュラーカルチャーが取り結ぶ新たな関係性を明らかにした。

観光における真正性の典型は、高級文化の卓越した美学や民俗文化の歴史的正当性といった、過去から譲り渡された「偉大な伝統」が有する普遍的な価値により構成される。ところが、今日、観光客が認識する文化の真正性が構築されるプロセスは、映画、マンガ、音楽などのポピュラーカルチャーと深い関係がある。「真正な文化」のありさまは多くの場合ポピュラーカルチャーを通して知られ、変容され、時にはポピュラーカルチャーそのものが真正性を帯びる場合もある。

真正性の構築にポピュラーカルチャーが介入する現代社会の状況は、芸術、宗教、歴史、哲学などの「由緒正しい」伝統が真正な文化を規定する独占的地位を喪失したことにより、「真正」と「非真正」の関係が新たな局面を迎えたことを示している。今日の真正性は永続に支持される観念ではなく、絶え間ない生成の過程に置かれており、伝統とポピュラーカルチャーの動的な結合関係を通して生み出される。

従って、伝統とポピュラーカルチャー、対極する二つの文化要素の接合の仕方を把握することは、現代観光における文化的真正性の実体を把握する上で非常に重要な意味を持つ。本研究の目的は、真正性が構築されるプロセスにおいて伝統とポピュラーカルチャーが取り結ぶ新たな関係性を考察することである。過去と現在の真正性がどのような方式で絡まりながら新たな意味を構築しているかを検討した。

真正性の構築における伝統とポピュラーカルチャーの関係を理解するための前提として、真正性が物事の正否を問う哲学的概念ではなく、社会行為の結果創られた社会的な概念であることを認識する必要がある。そのためには、「真正性」と、「真実」・「正真正銘」・「実体」などの概念を明確に区分しなければならない。「真正性」が示す言語的な意味とは裏腹に、「真正な物」が必ずしも「真実な物」である必要はない。真正性を語る上では重要なのは文化をめぐる事実関係よりも、「本物」に関する社会的な認識が如何にして構成され、意味づけられ、流通されているのかである。

真正性を本質的な概念に捉え、どこかに正真正銘の「本物」の存在を想定する場合、メディアの支配的な影響力がなかった過去の伝統から真正性を見出そうとする傾向がある。真正性が創られる過去と現在の方式の相違が、メディアが介入する今日の真正性は偽造された「まがいもの」で、過去の真正性こそ道徳的に優越だという文化的幻像を呼び起こすのである。

過去の真正性は、「高尚な」芸術や「正統性ある」伝統などが有する文化的な力に絶対的に依存する。文化の本質的価値に対する観念は、長期間にわたって蓄積されたものであり、そのパラダイムが維持される間は、芸術の審美性や伝統の実体が実は社会的な構築物であるということは気づかれにくい。その結果、真正性は偽りのない自明のものであると認識される。一方で、現代社会の文化環境のもとでの真正性は、文化的権威を持たないポピュラーカルチャーと密接に関連している上、短期間であからさまに刷新と再構築を反復するため、比較的簡単に虚構とみなされてしまう。

「伝統こそ本物」という考え方は、制度化した価値システムを基盤に、更新されることなく長い間持続されてきた昔ながらの真正性が享受する一種の文化的特権である。しかしながら、過去とは違い、現代に至っては真正性は信じられないほど速く複雑なプロセスを通して表象され、認識され、絶え間なく再構成されている。昨日真正だったものが今日も真正であるという保障も見通しもない。そして伝統は、永続的に真正の座に留まるのではなく、日常生活とポピュラーカルチャーの領域に入り混じり新たに意味づけられる。

従って、規範化した真正性がマス・メディアを通して再構成されるプロセスは、専制的に真正性を規定してきた伝統と、現代社会の新たな中心文化であるポピュラーカルチャーの間の必然的な衝突を含んでいる。人々が観光地の文化に関して認識するあらゆる観念と期待は、信憑性のある「客観的な事実」に基づいているというよりは、不確実な伝統的信念とポピュラーカルチャーの想像力の結合により生み出されたものである。そのように蓄積されたイメ

ージは、観光という社会的装置を通して公式化する。そして、その意味作用のプロセスの中で、観光地の「真正性」は完成するのであると理解することができる。

このようなプロセスを経て創られた現代観光の真正性に、伝統かポピュラーカルチャーのレッテルを貼ることは、構造的に無意味である。それは、純粋な伝統でも、完全なポピュラーカルチャーでもなく、現代の動態的な文化環境が誕生させたもう一つの文化形態であるといえる。

本研究の調査結果では、ポピュラーカルチャー観光地の真正性は、真正性を獲得するためお互いを必要とする過去と現在の結合により成立したものであることが明らかになっている。この文化融合のプロセスは、文化構築におけるポピュラーカルチャーと伝統、両者の相互依存的な関係性を説明している。

現代社会において真正性が成り立つには、正統性と大衆性という、相反する二つの価値が同時に満足されなければならない。どちらかの要素が欠如すると、真正性は効力を失ってしまう。「真正な文化」となるために、伝統は現代のポピュラーカルチャーが有する急進的な波及効果と大衆性を必要とし、ポピュラーカルチャーは過去の伝統が有する魔術化した価値と正統性を必要とする。その結果、伝統とポピュラーカルチャーの間では文化的接合が発生する。伝統の公式的地位とポピュラーカルチャーの大衆的支持が融合することで、新たな形態の真正性が生み出されるのである。従って、真正性をめぐる伝統とポピュラーカルチャーの折衝過程は、どちらかが完全に排斥されるまで繰り返されるヘゲモニー闘争ではない。むしろ、お互いの必要により文化的領域を超越して一体化する相互補完的な関係に近い。

真正性をめぐる伝統とポピュラーカルチャーの密接な利害関係は、現代社会で真正性が構築される典型的な展開方式をみせてくれる。伝統はポピュラーカルチャーの力を借りて影響力を拡大し、ポピュラーカルチャーは伝統の権威を背景に持つことで文化価値における優越性を獲得するのである。

このような文化構築の過程で、近代が規定した本物—偽物・高級—低俗などの境界に関する久しい信念は廃棄される。伝統とポピュラーカルチャーの脱分化と領域破壊は、この意味において「ポストモダンの」である。

ポピュラーカルチャーは過去から譲り渡された神話を根幹としており、より「本物らしく」なるために伝統の権威を必要とする。一方、伝統はメディアにより伝播され、ポピュラーカルチャーを通して大衆的支持を獲得しないことには生命力を失ってしまう。従って、伝統はポピュラーになり、ポピュラーカルチャーは伝統化する。現代の観光客が目にするのは、両者を区分する境界が完全に崩れ去った状態で創られた異質な文化の組み合わせ、いわばハイブリッドの文化である。そして、それこそは伝統の古典的な価値とポピュラーカルチャーの大衆的な価値が共存する文化的過渡期としてのいわゆるポストモダン社会の観光における「真正性」なのである。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

権 赫麟、文化の真正性をめぐる観光とポピュラーカルチャーの相互作用に関する研究、『観光研究』vol.24-1 (2012年9月掲載予定)

真正性の構築における伝統とポピュラーカルチャーの関係—中国河南省・崇山少林寺を事例として—、第26回日本観光研究学会全国大会